

オムツ・尿パッド・射精・玉責め・腸内洗浄・オマル
陣痛・下剤・分娩
ハビエンです!

「諒くん、食欲はどうかかな」

「あ……ええと……」

夕食の時間だ。昼食も食べていない。けれどお腹は空いていなかった。

「えと……」

「……じゃあ、お腹が空いたらおいで。先に食べているよ」

「……はい」

気を遣って一人にしてくれている——のだと思いたい。安西との空間が嫌でそうしているわけではないと。

あの後——篠崎の苦しそうな謝罪の後、安西は何も言えなかった。

(別れたくなんてないけど……)

でもこの身体のまま——むしろ産後に生理が始まるなんて。

(でも……)

受け入れるしかないのだろう。だって篠崎と別れるなんて選択肢は安西にはない。全く。

それは自分の中で揺るぎない気持ちだというのに、この身体のままだということがどうしても引っかかってしまう。すぐには受け入れることができない。

(……やだな……)

あまり考え込むと子供のことまで悪く考えてしまいそうだ。

(お前が悪いわけじゃないんだよ……)

身体が繋がっているから、もしかしたら気持ちや思考まで子供に伝わってしまうんじゃないか——そう思うと身体的だけでなく精神的にも制限を掛けられているような気分になってしまう。

(息苦しい……)

外に出てみようか。桜はまだ咲いていないけれど、きつと春の風は心地よいだろう。

「着替えよ……」

それでももちろん一人で行く気はない。外出するなら篠崎と一緒にがいい。普段の生活において一人にやりたいと思うことは絶対にない。あんな気まずい空気の後だというのに、今もうすでに寂しく感じてしまっている。

(もし振られたら……)

いや、きつとそれはない。だって篠崎は別れる気はない——つまりこの身体のままになることへの謝罪の言葉を発していたのだ。

(だとしたら……)

きつと今一人でいて不安に思っているのは篠崎の方かもしれない。

急いでベッドから降りダイニングに向かう。けれど篠崎がいたのはリビングのソファだった。

「しのぎき……?」

「諒……」

先に食べていると言ったのに篠崎は何も食べていなかった。ダイニングテーブルには二人分の食事。けれど篠崎はカップも持たずにソファに座っていた。テレビすらついていない。

「篠崎……」

「諒……」

篠崎も何と言ったらいいのか分からないだろう。いや、もしかしたら言うことはもう何もないのかもしれない。

別れない、という気持ちしか。けれどそれは伝えてある、と思っている。

「篠崎……僕……」

「……座るか」

篠崎が隣をぼんぼんと叩いた。それが寂しくて泣きそうになってしまう。普段ならおいでと言って手を伸ばしてくれるのに。なのに「座るか」なんて。

「篠崎、やだ……」

「……そうか」

「ちがつ……いつもみたいにして……」

「諒……」

困っている。どうして困ることがあるのだろう。つらいのは安西なのに。身体が変わってしまうのは篠崎ではないのに。

「おいでって、手を……」

「ああ……おいで」

求めていた言葉なのに近寄れない。だっていかにも言わされているみたいで。篠崎が来てほしいと思っ
ていないのならいけない。

突っ立ったまま床を睨む。

「諒、足が冷えるよ」

(あ、スリッパ……)

急いでいたからベッドのところで脱いだままになってしまっている。でも履きに戻ろうとは思えない。

「諒くん、おいで。すまなかつた」

差し出された手。おずおずと腕を伸ばすとしっかりと掴んでくれた。

「……気持ち固まったかな」

「……え？」

篠崎の膝の上に向かい合って座る。背中をぼんぼんと撫でる手は優しいのにやはり声はまだ硬かった。

「今の身体で生きていく決意だよ」

「……っ」

やはり篠崎は別れる気はない、ということだろう。それは当然安西も同じ気持ちだ。

「……すまない、すぐには受け入れられないだろうが……」

「……僕……」

何と言ったらいいのか分からない。伝えたい気持ちはあるのに言葉にできない。それがひどくもどかし
く、息苦しい。

「諒……」

引き寄せられ、篠崎の肩に頬を乗せる。一番好きな体勢だ。身体がピタリとくっつくし、篠崎の首筋の
匂いも嗅げるから。

頭の中はごちゃごちゃなのに、やはりそうしていると自然と心は落ち着いてくる。

(やっぱり……)

この場所を捨てるなんてできない。何があっても篠崎と一緒にいたい。

「……僕、僕も篠崎と別れるなんてできません」

「……本当に？」

「はい」

「だが身体はそのままだよ」

「……それは……多分すぐには受け入れられないと思います……でも篠崎が……」

「俺が？」

「多分……僕一人じゃ受け入れるのは無理だから、この身体を篠崎が愛してください」

「諒……」

「そしたら……多分受け入れられると思います。篠崎が大切に思ってくれる身体だからって思えば……」
何がどうなっても、結局安西にとって全ての基準は篠崎なのだ。篠崎が全て。

「……今でも諒くんを愛しているよ。どんな身体だろうと関係ない」

「……はい……そうだと……思っています。でも……」

「……時間は掛かるな。分かった」

「すみません……信じてないとかじゃないんですけど……」

「いや、分かるよ。突然の妊娠で、しかもこの身体のままなんて知ったら普通は動揺する。でもありがと
う」

「篠崎……」

「ずっと、何があっても離さないよ。絶対に手放したりしない。諒にお願いされたって無理だ」

「はい……ずっと一緒にいいです。三人でずっと一緒に」

「……そうだな」

「篠崎……？」

三人でずっと一緒に、はダメなのだろうか。それとも子供はいつか独立すると思っただけの間なのだろうか。
「いや……もしかしたら四人以上になることもあるんじゃないかと思っただけ」

「あ……」

そうか。子宮がそのまま残ると言うことは当然その可能性だってあるのだ。

「……すまない、でも子宮がいやなら手術で摘出することもできるだろう。産道だって塞いでしまえばいい。手術で痛い思いをさせてしまうが……」

「……篠崎は子供、兄弟がほしいですか」

確か篠崎には弟がいたはずだ。名前も聞いたことはないけれど。

「……どうかな」

この様子はきつとほしいと思っている。安西に家族がいなくても気が遣ってくれているのだ。

「……まずはこの子ですけど……でも、その後の様子次第で……一人っ子は寂しいかもしれませんから」

「……いいのか」

「僕、家族はいなかったけど大所帯で育ったんです。みんな兄弟みたいです。ゆうくんや廉太郎、美里さん。他にもたくさんの人に囲まれて育ったから」

「ああ……そうか、そうだな」

「……って、僕が出産に耐えられるかどうかですけど」

笑って言う。だって子供が何人欲しいなんて話をしておきながら、いざ出産の痛みを知って『もう二度と産みたくない』なんてなってしまうたら恰好悪いだろう。そう思って言っただけだったのだけれど――。

「諒、そんなことは口にしてはいけない」

「……篠崎？」

きつい口調。怒っていることはすぐに分かった。

「ダメだ、そんなことを言っては」

「あ……ごめん……なさい……」

神聖な出産に弱気でいてはだめ、ということか。でも怖い。すごく痛いという記事をたくさん読んだのだ。

「もう二度とそんなことは言わないでくれ」

「……ごめんなさい……」

胸が痛む。心臓の辺りがツキンと鋭く痛む。何かに刺されているよう。

「……や……」

「諒？」

篠崎なら恐怖心さえも受け入れて包んでくれると思っていたのに。なのに弱音を吐くことすら許されな

いなんて。

(でもそれが親になるっていうこと……?)

痛いのは怖い。誰だって怖いだろう。それに――。

「やだ……だって……作ろうと思っただけじゃやないのに……」

「諒――」

(あ……)

本気の怒りだった。

確かに今の発言は自分が悪い。

(でも……)

でも、そうだ。だっていつの間にかお腹に命が宿っていたのだ。それにまさか男の身体で妊娠なんて思っ

つてもみなかったし。きつと妊娠する身体だと分かっていたら避妊していただろう。

(なのにつ……)

「……諒」

「やっ……!」

胸を押し膝から降りる。

「やだっ」

「諒、おいで」

「やっ」

腕を掴まれた。手首が痛い。

「諒、いいことから」

「やだあっ!」

怒られる。また怒られる。それにきつと次はもう嫌われる。嫌われたら捨てられる。それなら一度時間を置いて、ちゃんと反省してからごめんなさいがしたい。今このぐちゃぐちゃの気持ちのままですべてを捨てるのは絶対に嫌だ。挽回のチャンスがほしい。反省するから、ちゃんと反省するから、

「諒――!」

「っ…………！」

ひゅつと喉が鳴った。

「あ…………あ…………」

息が苦しい。

「諒！」

「あつ…………うっ」

~~~~~

「…………産道をもう少し拡げておこうか」

痛みは骨盤が開く痛みと子宮口が開く痛み、それから子宮の収縮の痛みだと書かれていたけれど産道だつて余裕があった方がいいだろう。それに会陰だつて切れてしまうと聞いています。切るのが裂けるのかは医者次第らしいけれど、それだつてもししなくて済むのならその方がいい。

「はい…………してください」

篠崎はすぐに起き上がり、クローゼットから大きなデイルドを取り出した。それはもう、篠崎のペニスよりも太い。

「これ、入れてみようか」

「…………はい…………」

それでもまだ当然赤ちゃんよりは小さいものだ。でも見ただけで怖くなるほどの大きさ。

「これは亀頭が七センチある。これを入れて、そのまま過ごしてみようか」

「え…………」  
「ゆつくり抱き合つて過ごしてみよう。入れてすぐ出してしまうより、産道を大きさに慣れさせた方がいい」

確かにその方が中が拡がりそう。怖いけれど、出産の痛みを減らすことができるのだと思えば頑張れる。

頷くと、篠崎はテディとくまを連れて来てくれた。

「ほら」

「わ、ありがとうございます」

普段は抱っこしようとするを取り上げるのに。こういうときは触らせてくれるのかと思うと出産の準備も悪くないかもと思つてしまう。

(単純かな…………)

仰向けは苦しいけれど、膝を立てて足を広げる。あとは見ない。テディとくまを抱えてふわふわの毛に顔を埋める。

「ああ、おしっこも出てたな」

「あ…………うそ…………」

全く気付かなかつた。

「ねえ篠崎、出産のときもおしっこお漏らししちゃつたらどうしよう…………」

「ああ…………俺からドクターに説明しておこうか」

嫌だ。けれど長丁場になったらきつと漏れてしまう。それでなくても頻尿だから、きつと数回は出てしまうだろう。

「はい…………恥ずかしいけど…………」

「大丈夫。ちゃんとやつておくし、ドクターは理解してくれるよ」

まさかプレイの延長で、なんて言い方はしないだろう。そこは篠崎の常識と口の上手さを信用するしかない。

篠崎は尿パッドを新しいものに替え、それから産道に指を入れた。

「かなり柔らかくなつたな」

「そうですか？」

「最初はかなり硬かつたんだよ。できたてだったからかな。でももうちゃんと柔らかいし、俺の指を締め付けようとしてくるよ」

「やっ！」

恥ずかしい。まるで欲に忠実みたいじゃないか——そうだけど。

篠崎が丁寧に産道を広げてくれるうちに、いつの間にか産道でも快感を拾えるようになっていた。

「力を抜いて…………そう、上手。息を吐くのに集中しようか」

「ん、ふー……ふー……」

「いいこだ。よし、じゃあデイルドを入れるよ」

「はい……」

ドキドキする。だつてかなり大きいものだ。

「あつ……」

「痛いかな」

「ん……ちよつと……」

引き撃った感じがするけれど、それでも切れたような痛みはない。

「大丈夫です……」

「……うん、じゃあ進めるよ」

それはゆっくりゆっくり入ってきた。まさか指一本でも違和感のあったそこで、そんな太いものを咥えられるようになるとは思わなかった。

「っは、くう……」

「痛いかな」

「圧迫感がすごくて……」

「ああ……そうだろうな……。でももうほとんど入るよ」

「あ……ほんと……?」

「ああ、上手に飲み込めてる」

子宮口に当たるのはよくないから、と途中までの挿入にして、それから篠崎は抜けないようにと上からオムツをあててくれた。そして横向きになり、今度は背中から抱きしめてもらう。

「大丈夫かな」

「はい……でもすごい……いっぱい入ってます……」

「だろうな。でもちゃんと拡がった。毎日苦しいのに本当によく頑張ったな」

「篠崎がしてくれたからです……」

毎日毎日、一日三回程度篠崎は体調を確認しながら産道の拡張を進めてくれた。篠崎はずっと大変だったと思う。

安西の心の安定を図り、それから産道の拡張、定期的な射精、産後の育児グッズを揃え、安西に哺乳瓶でミルクを飲ませ、尿パッドやオムツを替え、オマルで排便をさせ、そしてお腹が大きくなってからはベッドでの排便介助。

篠崎には本当に感謝しかない。

「俺がしたくてしたことだよ。それに諒くんの方が何倍も大変だ。命を身体の中で育てる大変さは想像もつかないよ」

「そんな……」

篠崎はいつでも感謝の気持ちを表してくれる。毎晩寝る前にはありがとうと言ってキスをくれた。

「……篠崎、篠崎の欲しくなっちゃいました……」

アナルに欲しい。ちゃんと、今まで通り。産道の拡張のためとしてではなくて、アナルでちゃんと前のように篠崎がほしい。

「もう少し……我慢するから、そしたらデイルドを抜いて、お尻綺麗にしてください……」

一方的過ぎただろうか。篠崎の気持ちも確認せずに言ってしまった。

「いいのかな? 嬉しいよ」

そう言って押し付けられた硬いもの。興奮してくれていたことに安堵する。

「よかった……」

「諒くんのオムツを開くといつでも起ってしまう」

「ふふ」

さすがに毎回というのではないだろう。でもそう言ってくれることが嬉しい。

「……今のうちにミルクを飲んでおこうか」

「あ……いいですか?」

「作ってくるよ」

元々は便秘を治すために飲んでいた粉ミルク。最近でもメインの理由は排便をスムーズにさせるためだけれど、精神の安定という役割も大きくなってきていた。

(篠崎……)

哺乳瓶でミルクを飲ませてもらうのは大好きだ。甘えられるし、赤ちゃんに戻ったみたい。

(そういうえば最近子供に戻る日ってないな……)

子供に戻る日はピザをデリバリーしたりアイスやお菓子をお腹いっぱいになるまで食べた。でもそれ

を必要としないくらい赤ちゃんとして甘えさせてもらっていた。

(哺乳瓶にオムツ……オマル……すごい、本当に赤ちゃんだ……)

でもそういえば、どうして急に篠崎は赤ちゃん扱いをするようになったのだろう。

「篠崎」

ちようど寝室に戻ってきた篠崎に声を掛ける。

「何かな」

「あの、どうして急に……その、オマルとか……」

「ああ……まあもういいか」

「え？」

篠崎は苦笑していた。困ったように笑いながらベッドに上がり抱きしめてくれる。

「前から諒くんを赤ん坊のように可愛がりたいという気持ちはあったんだよ。けれどさすがに引かれるかと思つて。だがもう赤ん坊もできたし、逃げられないかなと思つたんだ」

それはつまり、赤ちゃんが枷になって、という意味だろう。

「……ひどい」

「すまない」

笑いの消えた声。本当に申し訳なく思つてくれているのならいいけれど、きつと怒っている理由は違う。

「そんなことで引いたり逃げたりなんてしないのに。赤ちゃんを理由にしなくたって」

「ああ、すまない。赤ん坊を利用してみたんだな」

「……違います。僕が怒ってるのは……僕の気持ち信じてくれなかつたことです」

篠崎に甘えるの大好きなのに——そう言う篠崎が笑つた。嬉しそうに。安心したように。

「ああ……そうだな。すまない」

篠崎でも不安に思うことがあるんだな、なんて変な感想を持つ。でもそれを口にする必要性もないかと篠崎のシャツを引く。

「……ミルク飲みたい……」

「うん、寄り掛かるうか」

起こしたリクライニングに寄りかかるようにして緩く上体を起こし、口に乳首を入れてもらう。もきゅもきゅと口を動かすと以前よりスムーズにミルクが出た。

「可愛い。美味しそうに飲むな」

「ん……」

お腹が大きいことと、産道にもデイルドが入つたままのせいでお腹はパンパンだけれど篠崎のミルクは全部飲みたい。それにちゃんと飲めば褒めてもらえるから。

「ゆつくりでいいよ。飲み終わったらおちんちんもマッサージしような」

飲みながらなのでこくりと小さく頷くだけで返す。

まだ性欲はないままでけれど、おちんちんやタマを揉んでもらうのは好きだ。それに先週頑張つて射精したばかりだから今日は勃起を急かされたりはしないだろう。

「お尻、久しぶりだな」

「ん」

「うんちのときに指を入れているからきついということはないだろうが」

(恥ずかしい……)

でももうオマルは使えていないので、この数週間毎日ベッドで排便をしている。オマルじゃないから便秘だつて関係ないのだ。こうしてミルクを飲ませてもらうこともあれば、指でアナルをほぐしてもらつて便の道を作ってもらうこともある。指を出すようにしていきんでそのまま便を出すこともあるし、少しだけお湯を入れてもらうことだってある。

方法は様々だけれど、何一つとして安西一人で排便する方法はない。トイレだつて掃除に行くしか用がない。

「今日はどうやって綺麗にしようか」

(確かに……)

中を洗浄するとなればそれなりに水分を出す必要がある。ベッドでそれをするとは悲惨なことになりそう

だ。

「逆を向いてオマルに出そうか」

「んー！」

そうか、確かにその方法があつた。どうして今まで気付かなかつたのだろう。

(あ、けど……)

オマルはアヒルの顔の横に掴まる部分がついている。だから安心して出せたけれど、反対を向いたら掴

まるところがない。

でもそのことにも篠崎はすでに気付いていたらしい。

「俺に掴まって出そうな。お湯を入れて、オマルに出す。うんちの匂いのする部屋でのセックスなんて恥ずかしくて興奮するな」

「んんっ！」

ミルクを飲んでいなければ「いや！」と叫んでいただろう。

(もしかして、分かかって今言った……?)

篠崎をちらりと見る。笑っていた。わざとだ。

「可愛いな。お尻の洗浄が楽しみだ」

「うううう」

ミルクを飲み終えると、お腹はさらにパンパンになっていた。息をするのも苦しいくらい。気を抜いたら戻って来てしまいそう。

「デイルドを抜くよ。軽く力を入れて」

「んっ……」

篠崎は呼吸に合わせてゆっくりと極太デイルドを抜いてくれた。亀頭部分が少し引っかけたけれど、切れたりはしていないようだ。

「わ……」

「ん？」

「まだ穴が空いている感じがします……」

「ああ……」

篠崎がそこを覗き込む。やめてほしいけれどお腹が大きい身体ではすぐに逃げることもできない。

「うん、ちよっと口が開いている。いやらしいな。中の写真を撮りたいくらいだ」

「変態……」

「諒くんに対してだけはな」

篠崎は焦るといことがない。いつだって余裕があつて、安西が吠えたところで子犬が騒いでいるくらいにしか感じていないのだろう。

「お尻にお湯を入れようか」

「はい……あ、けどどうやって……」

以前はお風呂だった。シャワーホースでお尻にお湯を入れてもらい、それをトイレで排泄していた。今からお風呂に行けばいいのだろうか。

「お風呂行きますか？」

「いや、洗浄器具を持ってくるよ」

そう言って離れた篠崎は洗面器にお湯を張って戻ってきた。そしてもう片方の手にはシリンジ。注射器のようなものだ。

「これでお尻に入れるよ」

「はい……」

恥ずかしい。でもお湯を入れられる快感もオマルに排泄する快感も好きだ。

「ん……」

篠崎にお尻を向けた状態で横を向く。排便介助と同じ姿勢。膝を抱えるような気持ちで背中を丸めるとお腹が楽だ。アナルを曝すのは恥ずかしいけれど、さすがにもう少し慣れた。

指で少しかだけアナルを慣らされてからお湯が入られる。気持ちいい。お腹の奥がじんわり温かくなつていく。

「可愛いな……お尻にお湯を入れられて気持ちいいのか」

「ん……篠崎もしたら分かります」

「遠慮しておく」

思わず笑いそうになってしまった。あまりにも素直過ぎて。

「ほら、力を抜いて」

「ふふ……」

笑うと力が入ってしまう。でもおかしかった。

「諒くん、俺はこのまま入れてもいいよ」

「えっ、やだっ！ やです、ごめんなさい……」

確かに篠崎は気にしなさそうだ。便秘の後のコロコロのうんちまで可愛いなんて言う人だから。

「んっ……あ、すごい……」

たくさん入ってくる。一体何回入れられるのだろう。

「よし……じゃあオマルに行こうか」  
「ん……」

まるで歩く練習をするかのように両腕を持って支えてもらう。篠崎は後ろ歩き。でも不安定さは皆無。  
「よし、上手にあんよができたな。いいこだ。じゃあ座って見ようか」

「ん……」

熱が一度上がった。あんよなんて。

「そう。大丈夫……うんちが飛び出してしまってもかまわないから出してみような」

「や、怖いッ」

前向きならいい。けれど後ろ向きだと本当に飛び出してしまふ気がする。だって反対向きに排泄するよ  
うな形には作られていないだろう。

「大丈夫だよ。んーってしてごらん」

篠崎は目の前で身体を支えてくれている。甘えるように首に腕を回すときゅっとしてくれた。近付いた  
首筋の匂いを必死に嗅ぐ。

「んっ……は、あん……」

「可愛い。えっちな声が出るな」

「ん……うんち……出る……」

「うん……いいよ……」

背中を撫でる手に合わせて身体から力を抜く。するとじよろじよろっと水分が出て、それからぐちゃぐ  
ちゃのうんちがドババツと出た。

「やあつ！」

音と悪臭がひどくて恥ずかしい。

「たくさん出せたな。少し溜まってたかな」

「ん……わかんない……」

身体が栄養を蓄えようとしているのか、最近食べる量が増えたからのような気もする。

「まだうんち出そうかな」

「出ない……」

「じゃあもう一度お湯を入れよう。ここで四つん這いになろうか。手足が痛いかな」

「大丈夫です」

ベッドに上がるのも面倒くさい。オマルから降りて、その場で篠崎にお尻を向ける。

「一度拭こうか」

「ん……お尻気持ち悪いです……」

「うん、柔らかいうんちがたくさんついてる」

篠崎は嬉しそうに言っ、それからお尻の肉の方まで拭いてくれた。

(そんなところで跳ねてたなんて……)

恥ずかしい。でも嬉しい。お尻、うんちを拭いてもらった。

「綺麗になったよ」

「ありがとうございます……中も綺麗にして……」

「ああ。入れるよ」

またシリンジでお湯を入れてもらう。何回も入れてもらって、お腹がたぶたぶになって、それからまた  
オマルに跨る。

「今度は水分が多いかな」

「ん……びちゃびちゃ跳ねそう……」

「いいよ。大丈夫。ゆっくり出してごらん」

「ん……」

少しずつアナルから力を抜く。しよろしよろという音がして、先ほど出したばかりの便に落ちた。

「あん……」

「ん？」

「ゆっくり出すの気持ちいい……」

「そうか。でも途中からはしっかり出さないとお腹が綺麗にならないよ」

「ん……はい……」

アナルを慣らすように最初はゆっくり。それから力を入れ、圧を掛けて一気にお湯を噴き出させる。

「ひゃあああああ！」

びちゃびちゃびちゃびちゃ！ とものすごい勢いでお湯が出た。それが尻に跳ねる。汚い。でもいい。

篠崎が綺麗してくれるから。



「あ……でたあ……ん、おしっこっ」  
「おしっこが出そう？」

約5万2千文字。完結です！

陣痛・出産シーンがあります。

子育て編は反響次第です。打ち切りの可能性もあります。  
宜しくお願い致します！